令和5年度　第1回午前（4科目）

桐蔭学園　中等教育学校　学力検査問題

国　語

令和5年2月1日　施行

注意事項

１．試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。

２．机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生どうしの貸し借りもできません。また、机の中には何も入れてはいけません。

３．スマートフォンは、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。

４．問題冊子の印刷が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。

５．問題冊子のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。

６．記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。

７．問題は２０ページまであります。

８．問題冊子は持ち帰ってください。

一

次の――線部のカタカナを漢字になおし、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

① 日本はシゲンを海外からの輸入に頼(たよ)っている。
② その分野に関してはヒンジャクな知識しかもっていない。
③ 粗大(そだい)ゴミをカイシュウする。
④ ゴール直前、ランナーが必死のギョウソウで走る。
⑤ 新しいメンバーを加えてチームをホキョウする。
⑥ 不通になっていた鉄道がフッキュウした。
⑦ 手厚いカンゴ体制のある病院。
⑧ 総合案内のコーナーを設ける。
⑨ 往来を行き来する人々を見つめる。
⑩ 傷心の友人をそっとなぐさめる。

二　次の文章は動物と人間の知能について論じた文章です。これを読み、後の問いに答えなさい。

サーカスなどの見世物として、算数を解いてみせる動物というのはいた。有名なのは天才馬ハンスで、彼は「ハンス、３＋４は？」などと聞かれると、ひづめで床を７回踏み鳴らすのだった。

だが、ハンスは算数を理解していなかった。それどころか、人間の問いかけも、理解していなかった可能性が高い。彼がやっていたのは、「さあ、いくつかな？」と問いかける声、あるいはジェスチャーを（注1）キューとして、床を踏み鳴らすことだ。ポイントは、観客も答えがわかっている、というところにある。

正解が７の場合に足踏みが７回目になると、観客はうなずく、手を叩くなど、無意識に「それが正解」というサインを送ってしまう。ハンスはそれを見て叩くのをやめたのである。これは、ちょっと意地悪な実験で確かめられた。例えば「３＋４は？」という問いを出すが、実はハンスにはこの問いは見えていない。ハンスには観客に見えないように違う問題を出すが、そのことを観客は知らない。つまり、観客はハンスに出された問いの答えとは違う数字を予期している。その場合でも、ハンスは観客に向けられた方の「正解」を出してしまうのだった。

このように、人間が「賢いと感じる」行動が、実はもっと①単純な仕組みで発現している、ということがある。その辺は注意が必要だ。特に遊びと呼ばれる行動の解釈については、「人間が見ると遊んでいるように見える」という主観が入りがちだ。

最近、ネット上でノガンモドキという鳥がゴルフボールを道路に投げつけてはまた拾っている映像を見た。これは「ボールをバウンドさせて遊ぶ鳥」となっていたのだが、②本当は遊びではないように思う。というのも、ボールを床に叩きつけた後、視線はずっと下を向いているのである。どころか、急に上から降ってきたボールに慌てて飛びのいている。バウンドすることを予期していたら、ああいう動きにはならないだろう。

多分、卵か何かを地面に投げつけて割る行動が先にあって、ボールを見てもつい、地面に投げつけてしまっているのだと思う。ところが割れたはずの卵は見当たらず、それどころか上から何かが降ってきて慌てている、というのが真相ではないか。

とはいえ、動物の行動は本当に、思ったよりも複雑な場合があるから油断できない。

動物学者の鈴木俊貴の研究によると、シジュウカラは「ヘビだ！」という警戒声を聞いて、ヘビを思い浮かべることができる。彼らは対ヘビ専用の鳴き声を持っているのだが（注2）捕食者に応じて警戒音を使い分ける動物はしばしばいる）、この声を聞いた後で枝を動かすと、大慌てで逃げるのである。

「ヘビだ！」という声を聞いていなければ、そこまで驚かない。おそらく、対ヘビ警戒声を聞いた時、彼らはちゃんとヘビを思い浮かべ、「ヘビどこ？　どこ？」状態にある。その状態で細長い棒が動くと、とっさに「ヘビ！」となって飛び上がるわけだ。

これは鳥のアタマの中をのぞくことに成功したような、③非常に巧妙な実験だと思う。

さて、（注3）鏡像認識のところで、ハシブトガラスには鏡像認識ができないようだ、と書いた。反面、ワタリガラスとハシブトガラスで、（注4）数の概念を持っている可能性が示されている。印が4個あるものを選べ、といった課題が解けるからだ。この実験の解釈は難しいのだが、印の大きさや面積を変えてもやはり識別できたことから、数を判断したのではないかと結論されている。

カレドニアガラスは道具を使うし、計画性もある。「パイプの中に餌があるが、こっちからでは取れないから、反対側から押して穴に落としてこっちから取り出そう」なんてこともすぐ読み取るのだ。ワタリガラスは将来の利益のために目先の利益を我慢することさえできる。

一方で、自他の区別がちゃんとついているかどうかは怪しい。「自分から見えないから、相手も自分が見えないはずだ」という振る舞いをしばしば見せるからである。このように、動物の知能の発達パターンは人間からするとチグハグで、バランスが悪いように思えることがある。

だが、考えてみたら、それは当たり前のことだ。知能というのは、生き残るための性能の一つにすぎないのである。だから、動物の知能は、その動物が必要とするものになっているはずだ。例えば、社会を作らない動物には社会的知能はいらない。だが、獲物の動きを読んで先回りする能力はいるかもしれない。

こういう一匹狼みたいな知能は、「人間でいうと何歳児並み」といった言い方ができないだろう。先読みは大人並み、社会

性ゼロ、道具使用はそもそも手がないのでできません、なんて動物相手に、「何歳くらいの知能」という言い方は通用しないのである。そういう意味で、④動物の認知能力を安易に「何歳児並み」と言ってしまうのは間違いだ。マスコミはそういうシンプルなフレーズが大好きなようだが。

人間の知能だって、決して（注5）スタンダードでバランスが取れているわけではない。実は、結構な（注6）バイアスがかかっている。

例えば、「4枚カード問題」と呼ばれるものがある。片面にアルファベット、片面に数字が書かれたカードを用意する。ここに「A」、「K」、「4」、「7」の4枚のカードがあるとしよう。

[A]、「実はカードに書かれたアルファベットと数字にはルールがある。片面が母音なら、その裏側は偶数でなくてはならない」と言われた場合、ルールが正しいことを確かめるには、最低限、どのカードをめくらなければならないか？

正解は「A」と「7」だ。

「母音の裏が偶数である」こと、およびその（注7）対偶である「奇数の裏は子音である」ことを確かめればいい。[B]、多くの場合、人間は「4」の裏が母音であることも確かめたがる。問いをよく見ると「偶数の裏が母音」とは言っていないので、「4」の裏を確かめる必要はない。

だが、人間は「お、やっぱり正解」という例を集めたがるのだ。[C]、「あるルールが適応されているっていうけど、ほんと？　ちゃんとルール守られてるの？」という点を、何度も確かめたくなるのだろう。正解が増えるほど、この世の確実さが増す、とでもいうように。[D]、母音の裏は偶数かを確かめたあと、「偶数の裏は母音だよね」という一対一対応を確かめたがる。

また、進化心理学者のコスミデスによると、人間は裏切り者の顔を覚えるのが早い。さらに、論理学的には犯人が特定できない場合でも、「あいつは裏切りものっぽい」という証拠があると、とっさに「あいつが犯人」と決定しがちである。

これについては、人間の認知が論理学的な正しさを追求するようにではなく、集団内で不利益をかぶらないために進化したせいだろう、という説がある。

集団を作ることにはコストと利益がある。町内会に参加していると夏祭りに出られるが、町内会費を払わなくてはいけない、

といった例を考えてほしい。この時、人間の知能は「会費を払っていないのに、祭りだけ楽しんでいる裏切り者を探せ」という方向に働くのである。

知能というのが何やら（注8）世知辛いものに思えてきたが、そもそも、生き残って子孫を残せさえすれば、知能なんて別にいらない、とも言えるのだ。

例えば、すごい力と爪と牙を持った動物がいたとしよう。この動物は道具を使う必要があるだろうか？　多分ない。道具なんか使わなくても、自分の体だけでなんでもできてしまうからだ。

もちろん、道具を使うことで、（注9）汎用性は飛躍的に高まるだろう。鳥の嘴は餌ごとに特殊化しているが、人間は道具を持ち換えればどんな作業もこなせる。自分の体を進化させるよりも早く的確に、環境に適応することもできる。だが、それすらも、子孫を残すための一手段にすぎない。

単に「草原に適応したサルとして生き延びる」だけなら、別にサバンナヒヒだってよかったのである。あるいは、2億年ちかく地球の海を支配し、海中の物質生産の基礎となり、2万種とも10万種ともいわれる（注10）珪藻はどうだろう。彼らは生物としては問題なく大繁栄しているが、おそらく、測れるような知能は持っていない。陸上では昆虫が最も栄えていると言っていいが、彼らだってさして知能が高いわけではない。

こうして見てくると、動物に⑤自分たちの知能の基準を当てはめ、「人間のレベルには達していないな」と安心するのも、あるいは「知能があるから人間は偉い」と思い込むのも、⑥単なる人間の独りよがりであり、人間の知能のバイアスなのではないか、と思うことさえある。

（松原始『カラスはずる賢い、ハトは頭が悪い、サメは狂暴、イルカは温厚って本当か？』より）

（注1）キュー＝進行開始の合図。
（注2）捕食者＝他の動物を餌として捕まえて食べる動物。
（注3）鏡像認識＝鏡に映った自分の姿を見て、自分だとわかること。
（注4）数の概念＝ものごとをひとつふたつと数でとらえる考え方。

（注５）スタンダード＝標準的であるさま。
（注６）バイアス＝考え方をかたよらせる先入観や思い込み。
（注７）対偶＝ある命題（正しいか正しくないかがはっきりと決まる文字や式のこと）の対となる命題。
（注８）世知辛い＝けちでぬけめがない。
（注９）汎用性＝広くいろいろな方面に用いることができる性質。
（注10）珪藻＝水中に生育する植物のひとつ。

問１　――線部①「単純な仕組み」とありますが、天才馬ハンスの例でいえばそれはどのようなことですか。その内容の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ハンスはサーカスの人間の合図によって、足踏みを始めたりやめたりしていただけであったということ。
イ　ハンスはジェスチャーに合わせて、決められた回数だけ床を踏み鳴らすようにしていただけであったということ。
ウ　ハンスは合図で床を鳴らしはじめ、観客の反応によって足踏みをやめるようにしていただけであったということ。
エ　ハンスは算数も人間の問いかけも理解はしてはおらず、単に足踏みをして遊んでいただけであったということ。

問２　――線部②「本当は遊びではないように思う」とありますが、筆者がそのように考えるのはなぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ノガンモドキはゴルフボールを地面に投げつければ割れるものと思っているようであるが、実際にはなかなか割れないため、必死になって何度も繰（く）り返しているように見えるから。

イ　ノガンモドキはボールを落としはするものの、跳（は）ねるボールを視線で追わず、視界の外から落ちてきたボールに驚（おどろ）くような行動をとるので、卵を地面に投げつけて叩（たた）き割る行動をボールに対してしているように思えるから。

ウ　ノガンモドキは卵を地面に叩きつけて割る遊びを好んで行うが、ゴルフボールは地面に叩きつけるとノガンモドキの視界から消えてしまうので、楽しんでいるというより、不思議がっているように見えるから。

エ　ノガンモドキは卵を割って中身を食べるという生存のために必要な行動をとるが、ゴルフボールは卵のように割ることができないばかりか、攻撃（こうげき）してくるような動きをするため、むしろ戦っているように思えるから。

問３　――線部③「非常に巧妙（こうみょう）な実験」とありますが、この実験が「巧妙」といえるのはなぜですか。次の文はその「巧妙」といえる理由を説明したものです。次の文の［　Ⅰ　］、［　Ⅱ　］に当てはまる言葉を、本文中の語句を用いて答えなさい。ただし、［　Ⅰ　］は三十字以内、［　Ⅱ　］は十字以内とし、句読点などの記号も字数にふくめます。

シジュウカラに［　Ⅰ　］ことと、［　Ⅱ　］ことを組み合わせることで、シジュウカラがヘビを思い浮（う）かべて行動しているかどうかを確かめることができるから。

問４　――線部④「動物の認知能力」とありますが、ここでの「動物の認知能力」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　動物が繁栄するために協力して発展させてきた巧妙な手段。
イ　動物が周囲の環境にあわせて進化させてきた社会的知能。
ウ　動物が生き残るために必要に応じて伸ばしてきた知的能力。
エ　動物が狩りをするために進歩させてきた発達パターン。

問５　本文中の空らん［　A　］～［　D　］にあてはまる語として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。同じ記号は一度しか使えません。

ア　だから　　イ　おそらく　　ウ　さて　　エ　ところが

問６　――線部⑤「自分たちの知能の基準」とありますが、本文中に挙げられている「自分たちの知能の基準」についての説明として適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　集団の中で損をしないように振る舞うことができるかどうかということ。
イ　社会性をそなえ、集団生活の一員として活動できるかどうかということ。
ウ　事態の先を予測し、計画性のある行動ができるかどうかということ。
エ　ものごとを数でとらえることができるかどうかということ。

問7　――線部⑥「単なる人間の独りよがりであり、人間の知能のバイアスなのではないか」とありますが、筆者がこのように考えるのはなぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　人間は集団生活を営みながら様々な環境に適応できるなど、他の動物にはない知能を持っているが、一方で自然環境を破壊し、他の動物を絶滅させてしまったりするなど、迷惑な一面も持っているから。

イ　知能の発達した人間は、高度な社会性と環境適応能力を備え、あらゆる動物を支配する存在であるために、自分たちが他の動物を超越した存在であると考え、人間の知能が最も優れていると勘違いしがちであるから。

ウ　人間は優れた知能を持ち、多様な環境で生存できるが、集団生活の中で自分の利益を最優先に行動してしまうため、必ずしも他の生き物のお手本になるような行動を取っているわけではないから。

エ　人間の持つ知能は人間が生き残るための手段であり、他の生き物たちはそのような能力を持たなくても繁栄できるのに、人間は自分たちの知能を他の生き物たちを測る基準にしてしまうから。

三　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

同じ中学の吹奏楽部に所属する有人と風香は、共に吹奏楽の名門、旺華高校に進学する予定であった。風香は旺華高校に入学できたが、有人は吹奏楽部のない羽修館に進学することとなった。有人が羽修館で仲間を集め吹奏楽同好会を立ち上げる一方、風香は努力の末、旺華高校の吹奏楽部のレギュラーに選ばれ、全国大会を目指して練習を続けていた。

風香が演奏する旺華高校のコンクールの曲は、中学の時に有人が演奏したことがある『アルメニアン・ダンス』という曲であったため、有人と風香で一緒に練習することになった。

「お互い大事な時期じゃない。もっと音楽に集中しようよ」

「……そりゃまあ、風香は大事な時期だろうけどさ」

つい拗ねた言い方をしてしまった。日頃は抑えようとしているものが声にこもったのだ。

――旺華の吹奏楽部で頑張っている風香に対して、やっかみがないといえば嘘になる。

風香にもそれが伝わったのか、困ったように黙ってしまった。急に後ろめたい気持ちになって、有人はわざと明るい声を出した。

「練習に集中すんのもいいけど――下手なら下手なりの良さってのもあるんだぜ」

言いながら頭に浮かんだのは吹奏楽同好会のことだった。一年生が五人加わって以来、合奏がぴたりと決まったことなど一度もないけれど、毎日の練習は楽しくやれている。

「羽修館の新人、五人のうち四人は経験者だし、初心者の川浜って奴もリズム感よくてどの打楽器も楽々こなすんだ。そのままならまた透田が一番下手になって先輩の立場がないとこだったんだけど、ちょうど野球部の応援演奏の話がきてたから、金管中心の編成を組もうってことになって、クラリネットの一年コンビはラッパ隊に決まったんだ。トランペットなら初心者だから一から基礎練習だし、透田は透田でトロンボーンに転向ってことで田子先輩とマンツーマン特訓なんだ。毎日ラッパ隊とトロンボ

ーン隊で、音が出たの出ないのってわいわいやってるよ」
「そういう楽しさは分かるけど――」①風香は楽譜に目を向けた。「有人くんは上手いんだし、もっと上を目指してほしいって思っちゃう」
「今の羽修館じゃ」②有人は楽譜から目を逸らした。「俺だけ上手く吹こうとしても浮いちゃうって」
「だからって、下手でいいって思ってほしくないな」
「下手でいいっていうか――下手でも持てる力ってあるんだよ。俺、羽修館の同好会でそれを学んだ気がする」
風香が、かすかにA首を傾げるような仕草をした。有人は③なんとか説明しようと言葉を探した。
「吹奏楽って、一人がちょっとくらい上手くたって、バンド全体と揃ってなきゃ始まらないだろ。逆に一人一人は下手でも、みんなが合わさった時にはすげえ力が出る。まあ俺たちはそこまでいってないかもしれないけど――今は俺一人が頑張るよりも、同好会のみんなで音をまとめていこうって方に意識が向いてるんだ」
「――みんなに合わせて、わざと下手に吹いてるの？」
「下手に吹きたいわけじゃないけど、自分は上手いんだって意識はなくなったし、俺一人でも上手く吹いてやろうとはしなくなった。それが中学の頃と一番違うとこだよ」
「中学の時は、そういうこと思って吹いてたってこと？」
「うん、どっかで独りよがりの意識はあった気がするんだ。あのままだったら――ほら、前に風香が話してた、旺華の一年生みたいになってたかもよ」
「旺華の一年って……小磯くん？」
「ちょっと吹けると思ってB鼻にかけてるのが心配とか言ってただろ。その話、前の俺にも当てはまるなって思ってたんだ」
「別に私、そういう意味で言ったわけじゃ――」
「いや、風香が嫌味で言ったってことじゃなくて、俺が勝手に考えてただけ。なんていうか……音楽の喜びは、上手く演奏することだけじゃないんだってのを、羽修館では実感できるんだよ。上手かろうが下手だろうが、嬉しさは同じなんだって」
トロンボーンで音が出ただけではしゃいでいた透田や、まるっきり遊びの感覚でリズム楽器を叩きまくっていた川浜の顔が浮

かんだ。クラリネットからトランペットに切り替えた花形と山尾だって、吹き心地の違いを面白がっている。みんな上手く吹く以前に、まずは音を出すこと自体を楽しんでいるのだ。まだまともな合奏もできない九人だけど、音楽の喜びは日々味わっている。

「この曲だって」楽譜を指さした。「上手くなきゃ『アルメニアン・ダンス』の良さを味わえないってわけじゃない。中学の時だって、つっかえながら吹いてても楽しかったじゃん」

「でも、音楽の喜びっていったら」風香が言い返した。「練習かさねて自分を高めて辿り着けるものだってあると思うけど。有人くんはもともと、私よりそれができたはずだし――」

風香はそこで口を噤んだ。有人が旺華に入っていたら、という言葉が呑み込まれたのだろうか。

それは多分、風香の優しさなのだろう。だけど有人は反発を覚えた。そうやって気づかわれること自体、見下されているみたいで面白くない。

「要するに、俺が向上心をなくしてるってことか」

思わず呟いた。風香は何も答えない。その沈黙に苛立った。

「まあとにかく」ため息と共に告げた。「まずは一緒に吹いてみようぜ。難しい話はそれからだ」

風香は無言でうなずいた。二人してサックスの準備にかかり、同じ楽譜に向かって並んだ。

こうやって一緒に吹けるのだって、音楽の喜びに違いない。なのに風香は、どうして悲しそうな顔をしているのだろう。そんな思いと共に息を吸い込み、同じ曲を吹き始めた。

密かに予想していた通り、有人の音は荒れていた。

（注1）風香がオーディションの時にイメージした音とは別人みたいだった。息と指遣いが微妙にずれるようだし、以前ならもっと伸びていたはずの音が途中で消えて（注2）倍音も響かない。――風香が上手くなったからそう感じるのかもしれないが、それを④寂しく感じた。

有人自身も自覚があったらしい。吹き終えたところで首を振った。

「ダメだ、しっかり練習してる風香には敵わねえや」
有人も高校でこの曲に取り組んでいたら、こうはならなかっただろうか。――頭に浮かんだが、口にはしなかった。かわりに漏れたのは、ちょっと冷たく響く言葉だった。
「やっぱり上手くなろうとしなきゃ、自分で納得いく音って出ないよ」
言いすぎかなと思ったが、正直な気持ちだった。下手なら下手なりの良さがあるとは言っても、有人はもともと上手いのだ。思うような演奏ができない歯痒さがあるはずだ。
「何回か練習すりゃあ、もうちょっと思い切り吹けると思うんだけど」
有人はリードに唇をつけ、軽い息で速いフレーズを繰り返している。自分の音を思い出そうとしているみたいな吹き方だった。
「一年生の指導とかで基礎をやり直してると、自然と音がよくなるよ。私もそうだったもん」
軽い口調で言ってみた。今度は上から目線の言い方にならないように気をつけたつもりだったが、有人はむっとしたように言い返してきた。
「羽修館には、サックスを指導する相手なんかいないって」
口元に、⑤苦笑というより皮肉っぽい笑みが浮かんでいる。有人がそんな笑い方をするのも珍しかった。
「いま俺が気にかけてるのは、少ない人数で応援演奏するための選曲とか、初心者でも吹きやすいように楽譜を直すとか、自分のサックスでどんだけでかい音出すかってことなんだぜ」
「でも、いい音を出す意識はいつも持ってた方がいいよ。旺華の角谷先生だって、日頃の心がけが大事ってところから指導していくんだよ。それが先輩から後輩にも伝わっていって――」
「そりゃ、俺だってそういうとこで吹きたかったけど……いや、それより」有人は首を振った。「俺にとったら、羽修館に入って仲間集めて、同好会作って……そこでやってきたことの方が大事なんだ。旺華の真似するよりも、羽修館ならではの音を出したい」
「別に、真似させたいわけじゃないけど」

風香の中で寂しさが膨らんだ。――去年、旺華の合格発表の後で、高校は別々になっても、吹奏楽は続けようと約束しあった。今だって、一緒に頑張っていきたい気持ちは同じなのに、どうして伝わらないのだろう。

春に羽修館の初ステージを見た時から、こうなる予感はしていた。二人で吹奏楽を続けているといっても、目指す方向がずれてきた。風香の思いを有人にぶつけてもぶつかり合うだけなのかもしれない。

「それじゃ、今度は羽修館の音で吹いてみてよ」

気を取り直して提案した。有人も、やってみるかと応じてくれた。

「第五楽章の『行け、行け』からでいいか？　ここが一番、雰囲気出せそうだし」

「いいよ。また有人くんがファーストで、私がセカンドね」

サックスを構えてほっとした。⑥二人で話したくて会ったのに、言葉が途切れた方が楽になるのは何故なのだろう。

有人の主導で吹き始めた。――そのまま音を通して分かり合えたらどんなにいいかと思ったが、二人の音はさっきよりも合わなくなった。いつもの練習通りに吹いている風香に対し、有人がわざと飛び跳ねるように音を弾ませるせいだ。

速い旋律を軽やかに吹きこなしているのはさすがだし、時々その音に風香が引っ張り込まれそうになる。そういえば中学の時にも一緒に吹くとそんな感覚があったなと懐かしくなったが、今はしっかりと自分の吹き方をキープできた。そのせいで音が合わないのは分かっていたが、ここは譲りたくなかった。

「風香、かっちりした吹き方だなあ」

吹き終えると、有人は真っ先にそう言った。風香の頑なさに呆れているみたいな口ぶりだったし、その点は風香も認めるしかなかった。

「部活で吹いてると、知らないうちにきっちりした感じになっちゃってるの。いざ先生から感情込めてって言われても困ることあるから、有人くんの吹き方も参考になったよ」

「感情っつっても」有人は C肩をすくめた。「羽修館は楽しく吹くってことしか考えてないけどな」

「それが、羽修館の音ってこと？」

「まあ、みんなでもっと練習積んでけば――」言いかけて、有人は照れ笑いを浮かべた。

「って、さっき風香が言ってたことか」
「分かってもらえた？」
風香はにっこり笑った。

（竹内真（たけうちまこと）『はらっぱフーガ』より）

（注１）風香（ふうか）がオーディションの時にイメージした音＝風香はレギュラー選抜（せんばつ）の部内オーディションの時に、有人（あると）が『アルメニアン・ダンス』を演奏した時の音を思い出しながらサックスを吹（ふ）いた。
（注２）倍音＝響（ひび）きを豊かにする働きのある音。

問1　……線部A「首を傾(かし)げる」・……線部B「鼻にかけてる」・……線部C「肩(かた)をすくめた」の本文中での意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A「首を傾げる」

ア　疑問に思う
イ　はっきり不賛成の意を示す
ウ　深い理解を示す
エ　深く考え込(こ)む

B「鼻にかけてる」

ア　意気ごみが激(はげ)しい
イ　相手の言葉に取りあわない
ウ　得意げになっている
エ　冷たい態度をとる

C「肩をすくめた」

ア　責任から逃(のが)れた
イ　腹立たしさを示した
ウ　重い責任を感じた
エ　わからないという気持ちを表した

問２　――線部①「風香は楽譜に目を向けた」、――線部②「有人は楽譜から目を逸らした」とありますが、風香と有人はそれぞれどのような気持ちからそのような行動をしていると考えられますか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　風香は音楽に集中して大事な時期を乗り切ろうと思っているが、有人は自分自身の目標を見失い、音楽と向き合うことから逃げたいと思っている。

イ　風香は一緒に合奏をするのが楽しみで待ちきれない気持ちでいるが、有人は合奏をすると自分の練習不足がばれてしまうと尻込みしている。

ウ　風香は練習を積み重ねて上を目指したいという気持ちでいるが、有人は自分一人だけ楽譜の音に忠実に練習を続けてもうまくいかないだろうと思っている。

エ　風香は自分の上達した演奏を聞かせたくてうずうずしているが、有人は自分の置かれた環境から練習をしたくないと思っている。

問３　――線部③「なんとか説明しようと言葉を探した」とありますが、有人が説明したかったのはどのようなことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　吹奏楽はバンド全体の音が揃って初めて音に力が出るので、全員が高いレベルの音を出せるようになることを目標として、練習を積み重ねていきたいということ。

イ　一人一人の演奏が下手でも、音を出すことを楽しみながら演奏して、みんなの音を上手くまとめることができれば、実力以上のよい演奏ができるということ。

ウ　自分一人だけいい音を出しても、バンドの中で自分の音が浮いてしまうため、みんなのレベルに合わせてわざと下手に吹くことで、合奏がぴたりと決まるようにしているということ。

エ　羽修館の同好会では音が出るだけでみんなが楽しくなり、遊びの感覚で演奏しているが、そのくらいのゆるさで活動を続けていきたいということ。

問４　――線部④「寂しく感じた」とありますが、ここで風香はなぜ「寂しく感じた」のですか。その理由を五十字以上六十字以内で説明しなさい。句読点などの記号も字数にふくめます。

問５　――線部⑤「苦笑というより皮肉っぽい笑みが浮かんでいる」とありますが、ここでの有人の様子についての説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　風香の上から目線の言い方に一瞬腹が立ち、自分ではどうにもできない環境の違いに少しやけになり、風香とは異なる状況にいることをあえて口にしている。

イ　風香が自分の状況を深く理解していることをありがたく思いつつも、素直に受け入れることができず、風香にむやみに意地を張っている。

ウ　自分の状況を前向きにとらえようとしていたものの、冷たいことを言われ、自分が心のうちにためていた同好会のメンバーに対する不満があふれ出てしまっている。

エ　自分の状況を正当化しようとしていたものの、図星なことを言われ、今の自分には音楽的な技術の向上を目指すような仲間がいないことに気づき、驚いている。

問６　――線部⑥「二人で話したくて会ったのに、言葉が途切(とぎ)れた方が楽になるのは何故(なぜ)なのだろう」とありますが、ここでの風香についての説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　今でも二人の仲の良さは変わらないはずだと思っていたが、演奏をすることでかえって二人の気持ちが離(はな)れつつあることに気づかされ、気持ちの整理がつかないまま意味もなく演奏を重ねている。

イ　昔のように一緒に練習することで関係が深まると思っていたが、置かれている環境の違いから目指す方向性が変わってしまい、会話をすることで逆にその方向性の違いが意識されてしまっている。

ウ　以前は会話が途切れることがなくいくらでも話せたが、お互(たが)いの気持ちのすれ違いから話が合わなくなってしまい、二人で同じ曲を演奏することによってなんとか有人と共通の話題を持ち続けようとしている。

エ　中学の頃(ころ)は二人とも互いに関心がなかったが、高校生になってからは二人の間にどのような感情が存在しているか気になるため、演奏をすることでお互いの気持ちを確認し合おうとしている。

問７　この小説を読んだ先生と生徒達が話し合いをしました。生徒Ａ～Ｅの中から内容を誤解（ごかい）した発言をしている生徒をひとり選び、Ａ～Ｅの記号で答えなさい。

先生……この場面で、有人と風香は二回、サックスを吹きますね。そしてどちらもうまくいきません。

生徒Ａ…一回目の後に、有人は自分の演奏能力が落ちていることを認めます。しかし自分の練習よりも、自分が立ち上げた同好会を形にするために、メンバーを集めたり、演奏の場を設定したりで、彼は精一杯（せいいっぱい）のように思われます。

生徒Ｂ…確かにそうですね。風香は有人の練習不足を指摘（してき）しますが、有人には上から目線のように聞こえてしまいます。音楽活動に恵（めぐ）まれている環境の風香と、ゼロからいろいろやらなくてはならない有人では、なかなかかみ合わないところがありますね。

生徒Ｃ…ふたりは後半でもう一回吹きますが、さっきよりも合わなくなっています。風香は、有人の軽やかな演奏に引き込まれそうになりますが、強い意志を持った彼女は、自分の吹き方を変えませんでした。

生徒Ｄ…風香は、部活の顧問（こもん）の先生から「感情込めて」と指摘されていました。彼女は音楽に感情をのせることが苦手なようです。音楽の本当の楽しさを知っているという点から、実は有人の方が幸せだともいえます。

生徒Ｅ…状況も演奏の方向性も異なる有人と風香ですが、相手のことを理解し合おうという意志はありますね。有人は自分の同好会も楽しむだけではなく練習を積まなくてはならないという風香のアドバイスを、受け入れていました。

（おわり）

令和５年度
第１回午前

国語解答用紙

教　室　番　号

座　席　番　号

受　験　番　号

氏　名

〈注意〉　※のらんには何も書かないこと。

一

①　②　③　④
⑤　⑥　⑦　⑧ けて
⑨　⑩

二

問１

問２

問３ Ⅰ

問３ Ⅱ

問４

問５ A B C D

問６

問７

三

問１ A B C

問２

問３

問４

問５

問６

問７

※　※　※　※　※　※